2016.5.25
No.195

編集・発行人　樋口みな子
E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

野幌から初夏の便りです

5.22
自宅庭のリンゴの花

新緑が目にしみる初夏を迎えました。今年の北海道はカタクリも桜も一気に花開きました。山の季節だなぁと遙かな山に思いを馳せています。

前号を発行してから2ヶ月。その間、野党共闘と市民が一緒になって闘った北海道５区の参議院補選や、植村裁判を支える市民の会の立ち上げ。そして札幌で初めての口頭弁論と報告会など毎日のように飛び回っていました。

みなさまはお元気でお過ごしでしょうか？

沖縄では20歳の女性が暴行殺害される事件がありました。米軍基地があるがために繰り返される性暴力事件。嘉手納基地では、女性遺棄事件に怒った住民が赤や黒のビニールテープで基地フェンスに×××と抗議の印を貼り付けました。沖縄だけに基地を押し付けてきた私たちにも責任があるのではないか？と思いました。

震度７の熊本地震の破壊力にも声を失いました。4月の廃炉の会の世話人会会議の時に知っ地震です。稼働したばかりの川内原発が心配になりました。その後も余震が長く続き、被害に遭われた人々の不安は想像を超えていると思います。「自分のところが地震で大変なことになるとは思っていなかった」と語っていた住民の声が印象的でした。

熊本地震では断層のズレが複雑に起きていて揺れの予測が難しいと報じています。活断層が近くにあるのに、川内原発を稼働し続けることに不安を覚えます。

原子力規制委員会の田中俊一委員長は「原発を止めるつもりはない」「想定外の事故が起きるとは判断していない」と述べました。居丈高なもの言いに驚きました。規制委員会は「原発のことは自分たちが決める」と言わんばかりです。地震活動が、さらに川内原発周辺にまで拡大する危険性はないとは言えないはずです。

東日本大震災でも、今回の熊本地震でも、時として自然は人類のその時点での科学の力によって出された想定をはるかに超えることがあると教えてくれました。だからこそ、リスクの高い原発の稼働には不安を感じている市民が多いのではないでしょうか？

3.11事故で、福島県内の広い範囲が汚染されて住民は不安を抱えて生活しています。

いますぐ原発を止めてください。

５月１日は水俣病公式確認から６０年になりました。東京での特別講演会に２日間参加しました。市民運動に関わるようになった原点が水俣病でした。詳細は次ページをご覧ください。

早くから取り組んできた吉岡しげ美弾き語りコンサートは６月３日です。いつまでも平和で、あらゆる命が大事にされる社会を願って歌う吉岡さんの弾き語りをたくさんの方と聴きたいと思います。

5.12 ピセナイ林道のソラチコザクラ

水俣病公式確認から６０年　特別講演会に参加して

水俣病の公式確認６０年を記念した特別講演会が５月３日から５日まで東京大学安田講堂であり、私も２日間だけ参加しました。

柳田邦男さんや森達也さんなど、水俣にゆかりのある方や水俣市の漁師、杉本肇さんらが講演し、約９００人が耳を傾けました。

1956年5月1日、当時水俣市で最も大きかったチッソ水俣工場付属病院の細川院長から水俣保健所に口頭で届けられたことをもって、後に

「水俣病（発生）の公式確認」と言われるようになりました。

しかし、水俣病とおぼしきカルテの記載は、太平洋戦争開戦の年までさかのぼります。人の一生に匹敵する歳月を経ても水俣病事件は解決したとは言えない状況にあります。

全国での「水俣展」を機に発足した水俣フォーラムは水俣病の犠牲となった方々に思いを馳せ、この事件を振り返るとともに、現代社会のあり方を改めて問い直す3日連続の特別講演会を開催しました。

会場のステージ上には、水俣病患者約５００人の遺影が掲げられ、講演前に参加者が献花しました。初日の３日は「苦海浄土」の作者である石牟礼道子さんの新作能「不知火」の一部が演じられました。「夢ならぬうつつの海に海底より参り候」で始まりました。石牟礼さんは熊本市からの中継映像で「水俣病の事件と一緒に生活して参りました」などと語りかけましたがたくさんの取材人に囲まれていたせいか体調はあまり良くなかったようです。

「祈るべき天と思えど天の病む」をテーマにフリーキャスターの小宮悦子さんの司会で進められました。

経済学者の除本理史（よけもとまさふみ）さんは、福島で東京電力を救済した政府の手法と水俣病でチッソを救済した政府の手法の共通点を指摘しました。水俣の悲惨を見てきた人たちは「また水俣の苦しみを背負った」と福島を見ていると語りました。

映画監督の森達也さんは今の時代を「分かりづらい事を世間は嫌いはじめた」「社会が容易に二元化されてきた」「メタファーを使いづらい。アイヒマン的な人が増えている。水俣病は日本の近代化の暗部であり、近代化の間違いが凝縮されている」と語りました。

ノンフィクション作家の柳田邦男さんは「水俣病を国家が検証して来なかった。３・11の震災と原発事故も同様。想定外と言って災害と向き合っていない 」と語りました。

漁師であり語り部である杉本肇さんは「祖父母、両親が水俣病で認定されたが、高校卒業後、水俣を長い間離れていた。32歳で水俣市茂道に帰郷し、もう逃げないと決めた。母は水俣病の語り部だった。語ることで生かされたんだと思う。自分も母の死後、語り部をしている」「多くの人に水俣病を知って欲しい」と語りました。

水俣病は「チッソ」が、戦前から不知火海に排出してきた有機水銀の中毒で目が見えにくい、手がしびれるなど、全身の機能障害に陥る人が続出しました。水俣病の発見以後、患者としての認定を申請した人たちは1万9千人以上にも上りますが行政が正式に認定した患者は熊本・鹿児島の両県で計2280人（3月末現在）にすぎません。「発見」以前に亡くなった方もまったく認定されていません。現在も2000人以上が認定申請を済ませて処分を待っており、未認定患者らによる訴訟も続いています。患者や地域住民への、差別や偏見、無理解は全くなくなってはいません。

２日目の水俣病講演会は、オルガンとソプラノ歌手による合唱「レクイエム」で始まりました。水俣病で亡くなった人の悲しみに思いをはせながら聴きました。

この日のテーマは「地の低きところを這う虫に逢えるなり」でした。

生命科学者の中村桂子さんは「高度経済成長時代、公害が続発。水俣病はその最たる象徴だった」思い至ったのは「生物としての人間を知る」「生命を基本に置く社会」だと語りました。

もうそれ以上聞く時間がなく、飛行場に向かいました。

たくさんの学びがあった水俣フォーラムでした。

鎌倉の友人一家や、旭川時代の友人とも久しぶりに親交を深めることができて楽しかったです。電車の乗り継ぎに緊張しましたが、北海道と違って車を利用しなくても公共交通機関で移動できるのが便利ですね。

植村裁判を支える市民の会ブログ http://sasaerukai.blogspot.jp/を是非ご覧ください。

「ひとり原告の権利、自由の問題ではない」

植村裁判　第一回口頭弁論が開かれる

4.22 札幌地裁に入廷する植村さん（中央）と弁護団

週刊金曜日５月１３日号に長谷川綾さん（新聞記者）が書いた文章が掲載されました。ご本人の了解の上要約して掲載します。

4月22日、札幌地裁805号法廷。元朝日新聞記者の植村隆氏が、25年前に書いた慰安婦問題の記事を「捏造」と決めつけられ名誉を傷つけられたとして、櫻井よしこ国家基本問題研究所理事長と、「週刊新潮」「週刊ダイヤモンド」「WiLL」の発行元3社に損害賠償計1650万円と謝罪広告などを求めた訴訟の第１回口頭弁論が提訴から1年2ヶ月を経てようやく始まった。

地裁最大の80席の法廷で、記者席などを除く傍聴57席に対し198人が傍聴券を求め、抽選倍率は3,5倍。櫻井氏は弁護士ら６人と出廷。植村氏側は弁護団107人中28人がそろった。

意見陳述に立った植村氏は、大学や家族への脅迫をやめさせるために提訴に踏み切った経緯を振り返った。

――北星学園大学が雇用継続を決めたら「国賊の娘を必ず殺す」と高校生の長女を名指しした脅迫状が届き、足が震えた。ネットで写真と名前がさらされても気丈に振る舞っていた長女が、弁護士に話を聞かれると涙をこぼし、胸が張り裂ける思いがした――。

そのうえで櫻井氏の三つの問題を指摘した。

第一は、櫻井氏の記事の間違いだ。『産経新聞』で元「慰安婦」の金学順氏の経歴について「（対日保障請求訴訟の）訴状で、14歳で継父に40円で売られ、3年後、17歳の時再び継父に売られたと書いている」とあるが、訴状にこうした記述はない。

第二は、植村氏が「『女子挺身隊』の名で戦場に連行され」と書いたことが「慰安婦」と無関係の「女子挺身隊」を結び付け、強制連行説を捏造したとする櫻井氏の主張の矛盾だ。

当時の韓国では「慰安婦」のことを「女子挺身隊」と呼び、日本メディアも同様の表現をしていた。

第三は、北星大が爆破予告などの脅迫に苦しんでいる最中、暴力批判より「朝日」や植村攻撃、大学批判に力を注いだかのような櫻井氏の姿勢だ。

これに対し、櫻井氏は「慰安婦」問題否定派の歴史観を全面展開した。「慰安婦」問題と強制連行は「濡れ衣」であり「朝日新聞社が社を挙げて作り出した」と主張。

「司法闘争に持ち込んだ手法は、言論・報道の自由を害し言論人の名に悖る」と切り返した。

この裁判が注目されるのは、不買運動、広告主への圧力にまで広がる「朝日」バッシングを見て新聞、テレビが萎縮を続ける中、当の「朝日」元記者が反論に出た点だ。

櫻井氏は「言論人なら言論で応じよ」と言う。だが、植村氏側の伊藤誠一弁護団共同代表は、法廷でこう反論した。「『朝日』バッシングに加わるものは、メカニズムを熟知しているかのように『植村』『朝日』を特定して攻撃する。その攻撃に屈したかのように言論空間が極端にせばめられている。ひとり原告の権利、自由の問題ではない。自由な言論の交換によって脈打つことができる、わが民主主義の危機的事態だ」。

日本の「表現の自由」を調査した国連特別報告者デービッド・ケイ氏も4月19日発表した報告で「慰安婦」、原発事故などでの「報道の萎縮」に言及。ジャーナリストでただ一人、植村氏の名前を挙げ「歴史教育と報道への妨害」への章でこう記した。「就職した大学は解雇の圧力を受け、自身だけでなく、娘に性暴力、殺害を含む脅迫までされた。彼は警察の警護を受け、政府の何人かは大学を支持した。この種の問題では、ジャーナリストとして仕事をする権利を支えるため、当局はより強い非難を出してしかるべきだ」。

民主主義社会のあり方を問う注目の裁判。第二回口頭弁論は6月10日午後3時半から開かれる。（長谷川綾・新聞記者）

左から、上田文雄さん、植村隆さん、佐高信さん

報告集会は「かでる2・7」大会議室で開かれ、会場は220人の参加者で満員。東京からは共同代表の香山リカさんと崔善愛さんもかけつけました。

植村さんの挨拶の後、札幌と東京の弁護団からの報告、佐高信さんの講演「櫻井よしこは何者か」、上田文雄さん（前札幌市長）が加わったクロストークがありました。（写真・支える会提供）

「植村バッシング」を特集した「抜き刷り」が「週刊金曜日」から５月末に出版します。植村裁判を支える会で買えますので是非読んでください。uemurasasaeru@gmail.com 又は090-9755-6292へ。

雨のピセナイ山　1027m

5月12日、3時半起床。雨が降っている。久しぶりの登山です。大谷地に集合して10人が3台の車で、新ひだか町に向かいました。めざすは日高山脈全域を展望できるピセナイ山（1027m）です。写真は林道脇に咲いていたオオサクラソウ。

11日にピセナイ林道が開いたばかり。崖くずれしそうで、時々倒れた木や石などが道をふさいでいる悪路を進みました。それでも林道の途中からは歩くことも覚悟していましたので、登山口近くまで車で行けたのはラッキーでした。

静内川上流の沢沿いの岩場に愛らしいソラチコザクラ（一面の写真）がびっしりと咲いていて感激！

小雨はずっと続いています。

最初から急登。さすがに日高の山は厳しい。でもいつか、素晴らしい眺望にあえるはずと黙々と歩を進めますが、頂上に近くなるにつれて風も強くなる。頂上は10時５５分。日高山脈は雲にすっぽり覆われている。

簡単な食事をして11時20分下山開始。よくこんな厳しい急斜面を登ってきたものだと、行きよりも帰りは慎重に下山しました。

風が強い上に、足を踏み外したら、下まで転げ落ちそうなところがいくつもありました。12時45分に駐車地点に到着。

下山したら晴れだしたんです。もう少し早くに晴れて欲しかったです。

新冠の温泉レコードの湯で汗を流し、近くのオオバナノエンレイソウの群落を見て無事に帰宅しました。

まだ体力は落ちてない？！と確認できたし、花も楽しめて満足しました。また再挑戦したい山です。

静内の風物詩、馬の放牧ものんびりして心なごみました。

静内の放牧馬

オオバナノエンレイソウ

「安保法制がねらうもの」渡辺治さん講演会に250人！

5.8 北海学園大学で講演する渡辺治さん

5月8日、10時から北海学園大学で市民学習会実行委員会主催で「安保法制がねらうもの」講演会がありました。

日曜日の朝にも関わらず、250人近い市民が参加し、憲法学者の渡辺治さん（一橋大学名誉教授）のお話を聞きました。

1960年の安保闘争以来55年ぶりの共同が国民的な闘いになったこと。そこに至るまでの長い道のりについて説明しました。

渡辺さんは9条の会で長く市民運動をされてきた方です。野党共闘を後押ししたのは「戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委員会」の地道な活動です。市民運動の共闘を求めるたゆまぬ努力もありました。渡辺さんの熱弁は続きました。

渡辺さんの学生時代の友人達も国会前のデモに参加しました。「行ったよ」というメールが飛び交ったと、振り返りました。

ＳＥＡＬＤｓの果たした役割も大きかったけれど、中高年層の広範な立ち上がりや、女性の立ち上がり、ママの会も生まれました。

一番印象に残ったのは、地方で保守層の安倍政権離れが起きている話でした。広島県庄原市では「ストップ・ザ・安保法制 庄原市民の会」を作り自民党市議も含む市議のほとんどが会員だと語りました。

10時から始まり、終わったのは13時。渡辺さんは熱い人です。

市民運動に明るく、野党共闘と市民運動の共同の素晴らしい成果に、その一人になれたことを改めて確認できました。

憲法は国民の中に定着している。憲法の生きる社会を実現させようと結びました。

とても元気の出る講演でした。

スプリング・エフェメラル

4.24 カタクリ

カタクリやエゾエンゴサクなどをスプリング・エフェメラルと呼びます。春のはかなきもの。美しいことばですね。

江別近郊の春の森でサファイアのようなエゾエンゴサクと、可憐で奥ゆかしさを感じるカタクリが一面に広がっていました。

参 BooKs

茶色の朝

フランク・パヴロフ　物語
ヴィンセント・ギャロ　絵
高橋哲哉　メッセージ
藤本一勇　訳　大月書店　1000円

世界10ヶ国以上で出版。（初版は2003年）「ごく普通の国家」に全体主義が、日々の生活に知らぬ間に忍び込み、人びとの行動や考え方をだんだんと支配するようになるさまを描いたショート・ストーリー。日本語版のために、ヴィンセント・ギャロが描いた新作「Brown Morning」14点、哲学者・高橋哲哉のメッセージが加わった日本だけのオリジナル編集です。

反ファシズムの寓話。今の安倍政治のやり方ととても似ていると思いました。この国の行方を決めるのは主権者である私たちです。民主主義を奪われないために間違っていることには声を上げ続けなければと思います。選挙も大事です。是非、若い人に読んで欲しいです。

高橋哲哉氏のメッセージから

フランスの読者にとって、茶色brunはナチスを連想させる色です。ヒトラーに率いられたナチス党は初期に茶色(褐色)のシャツを制服として着用していたので、茶シャツ隊はナチスの別名になったのです。

「茶色」は、ナチスを連想させるだけではありません。そのイメージがもとになり、今日ではもっと広く、ナチズム、ファシズム、全体主義などと親和性をもつ「極右」の人びとを連想させる色になっています。

安倍政権にひれ伏す日本のメディア

マーティン・ファクラー著
双葉社1000円

本書でメディアに長く携わってきた著者が今の日本のメディアの危機的な状況を痛烈に批判しています。

マーティン・ファクラーはアメリカを代表する新聞「ニューヨーク・タイムズ」の前東京支局長でした。

福島第一原発の事故をめぐる「吉田調書」と慰安婦問題にからむ「吉田証言」問題で朝日新聞が窮地に追い込まれたとき、他の新聞やテレビは擁護するどころか萎縮しましたが、アメリカのメディアは、ライバル同士が対権力では連帯し、応援しあうと書きます。日本のメディアも今の安倍政治に対抗するには連帯することが大事だと思います。

「日本では国家による市民監視はまだアメリカほど厳しくはない。だからこそ、今のうちに監視国家化に対する準備を進めておくべきだ。もっと切迫した危機意識を持たなければ危険だ」と警鐘を鳴らします。「いつまでも『タコツボ型ジャーナリズム』をやっている場合ではない。個々の記者が専門職としての強いプロ意識を持ち、なおかつ横のつながりを築く必要がある」と書きます。

映画「スポットライト　世紀のスクープ」で描かれていたのは、さまざまな圧力に屈せず、事実を調査し報道した記者たちの姿でした。

民主主義と報道の自由を守るために、多くのメディア関係者は立ち上がってほしい。

朝日新聞では最近「慰安婦問題を考える」深く掘り下げた記事が出ました。戦場における女性の人権問題など、今後もさまざまな側面から慰安婦問題を伝えるとありました。嬉しい記事でした。

いい記事は必ず市民が応援します。

日本会議の研究

菅野完著　扶桑社新書　800円

「日本会議」から出版停止を求める申し入れがあり、買い手が殺到し、書店からあっという間に消えた本です。私は菅野さんの　「草の根保守の蠢動　～日本会議は何をめざすのか～」講演会の時に購入しました。

「日本会議国会議員懇談会」に所属する国会議員で、安倍内閣の閣僚の８割を占めているという。

最近よく耳にする「日本会議」って何だ！と菅野さんが、膨大な資料をあたり、読み込み、明らかにしたのが本書です。

日本会議の運動手法はどのように実践されているのか？改憲運動を大きな柱とし「1000万人署名集め」と「地方議会で『国に対し早期に憲法改正を目指すことを求める、意見書』を採択させる」というものです。活発な請願運動により改憲へと動いています。驚きだったのは広範な「国民運動」の推進役を担っているのは、神社本庁でも神道政治連盟でもその他の日本会議に参加する宗教団体でもなく「日本青年協議会」であることでした。

椛島有三はもとより、高橋史朗、百地章、村上正邦、安東巌らがどのように日本会議と関わってきたのか、どのようにつながっているのかを、詳細な調査によって明らかにしています。７０年代、左派学生運動と民族派学生運動が激しく対立し長崎大学では「生長の家学生運動」が勝利を収めました。

先に述べた 椛島有三ら「一群の人々」は４０年以上にもわたって休むことなく運動を続け、どんな左翼・リベラル陣営より頻繁にデモを行い勉強会を開催し、陳情活動を行い署名活動をしてきたのです。その地味とも言え

る草の根市民運動が今、「改憲」という結実を迎えようとしています。そうはさせてはならない。

菅野さんは賢明な市民が連帯し、彼らの運動にならい、地道に活動すれば、民主主義は守れると書きます。

夏の参院選まで数ヶ月。動員力のある日本会議と心して闘わなければと思いました。

東京零年

赤川次郎　集英社　1900円

報道や思想の自由が国家に管理される世界を描いた近未来小説です。

反権力のジャーナリスト永沢との過去の熾烈な争いを背景に、生田目の息子健司と永沢の娘亜紀とが偶然出会い、権力の罠にはまりながら、サスペンスフルな旅を始めます。若い二人は警察国家の暴力に次つぎと直面します。やがて権力の側にいた生田目さえ側近に裏切られます。

すべての関係者の生活を、隅から隅までつかんでおけるという監視システム。新聞やテレビが警察発表以外のことは一切報道しないというメディアのあり方。また、監視カメラが人を追い、ケータイが人の居場所を教える。弱い者がさらに弱い者を攻撃する。今、まさに日本がそうなりつつあるのではないかと、怖ろしくなりました。

しかし執拗に追い詰められ、社会から消されようとする亜紀を救う人もいました。健司と亜紀の権力に立ち向う姿が希望につながる新たな出発を予感させます。

主人公たちと一緒に権力に立ち向かっていくような気持ちで読み終えました。

こんな監視社会はあってはならない。しかしいつの間にかそんな社会を許しているのではないでしょうか？

この本で吉川英治文学賞を受賞した赤川さんは「近未来小説として書いたが、現実が追いついてしまった」と語っています。また「紛争やテロも、力を持った者が弱者を従える快感が問題の根幹にある」とも語っています。「支配される側がどう感じるのか、という想像力を育てることが、問題解決の唯一の道」と語る赤川さんに共感しました。

三毛猫ホームズの遠眼鏡

赤川次郎著　岩波現代文庫　800円

本書は岩波の「図書」に連載された30回のエッセーをまとめたものです。2015年出版。

文学、芸術、音楽、映画などの身近で懐かしいエピソードから、震災後の社会、政治、経済などへの義憤溢れる批評は痛快です。

どのエッセーも示唆に富む内容ですが一部紹介します。

「今、新しい都市伝説の主人公が日本を深い闇の中へ引きずり込もうとしている。国際舞台で、原発事故の状況はコントロールされていると、堂々とウソをつき、戦争できる国にすることを積極的平和主義と呼ぶ。安倍政権を支えたい経団連が好景気のイメージ作りをしているだけで、原発の収束も、大地震への備えも、高齢者が増え続ける問題もすべて後回しにして、オリンピックやリニア新幹線に金を注ぎ込む。十年、二十年後に、どんな地獄が持っているか。NHKの特集がどんどん右寄りになり、政府に批判的な番組やキャスターは次々に姿を消す。そんな日も遠くない」。（スリッパはどこへ行つた）から

水俣病を知っていますか

高橋　武著　岩波ブックレット

公式確認から６０年を迎えた水俣病。あまり報じられることがなくなって、水俣病はもう終わったと思っている人も多いと思います。

私が水俣病と出会ったのは1970年です。その後の市民運動に関わる原点です。

冒頭に登場するのは田中実子さん。実子さんは、3歳になる直前、姉とともにチッソ附属病院に入院しました。翌月の1956年5月1日，病院長が「原因不明の疾患が発生している」と保健所に報告したことが、のちに「水俣病の公式確認」と言われるようになります。それから今年で60年もの月日が流れました。実子さんは現在に至るまで言葉を発することのないまま、その長い年月を生きてきたのです。

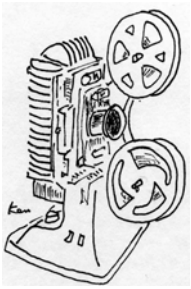
私たちはどこまで水俣病問題の実像を知っているのでしょうか。今もなお，多くの人たちが救済を求めているのはなぜなのでしょうか。

熊本日日新聞の記者として水俣病を取材してきた著者が，さまざまな人物を織り込みながら，事件の軌跡をたどります。そして、私たちにどんな教訓が投げかけられているのかを問うていきます。

紙面が尽きてしまいました。『水俣から福島へ　公害の経験を共有する』著者の山田真さんは小児科医。森永ヒ素ミルク中毒被害者の支援を続けた人です。その後、水俣病、福島の子どもたたちのサポートをしています。闘う小児科医です。

写真集『チェルノブイリと福島ー人々に何が起きたか』は広河隆一さんが３０年間みつめてきたチェルノブイリと福島で何が起きているかを写真で伝えています。（み）

「スポットライト　世紀のスクープ」
トム・マッカーシー監督



わずか数人の地方紙の新聞記者たちが、カトリック教会による組織ぐるみの犯罪隠ぺいを暴露した実話の映画化で、登場人物も実名です。

アメリカの地方紙「ボストン・グローブ」は神父による子どもの性的虐待と、カトリック教会がその事実を看過していたということを、関係者から情報を引き出し、被害者たちの悲痛な叫びを丁寧に聞き取り、疑惑を裏付けるために埃にまみれた膨大な資料を洗い直します。

求められるのは、何度もくじけそうになりながら積み重ねる地道な努力です。試されるのは仕事への矜持であり、正義を追及する信念であり、被害者の気持ちを代弁できる人間力でもあります。

スポットライトを浴びることのない記者たちの地道で粘り強い取材過程が丹念に描かれていて感動しました。これぞ記者魂です。

植村さんも慰安婦問題を書いたのは、戦争中に虐げられた女性たちへの共感があったからだと思います。

国際NGO「国境なき記者団」が発表した報道の自由度ランキングで、日本の順位は７２位でした。メディアはこの映画の記者たちのように、圧力に屈せず、間違っていることは間違っていると報じてほしい。正しいことは正しいと言える社会であってほしいと思います。自由に物が言えない状況は異常です。

言論の自由が脅かされている我が国ですが、この映画はジャーナリズムのあり方を問う、今観るべき作品です。

「アイヒマン・ショー　歴史を映した男たち」
ポール・アンドリュー・ウィリアムズ 監督

61年にイスラエルで開かれた歴史的裁判「アイヒマン裁判」。これは、第2次世界大戦下のナチス親衛隊将校であり、ホロコーストを推進した責任者アイヒマンの罪を問うものでした。

誰も実現することができなかった裁判のテレビ放送、それもナチスの戦犯アイヒマンを裁く模様を全世界に伝えようと奔走した制作チームの物語です。

全世界にテレビ放映を企画したプロデューサー、ミルトンはハリウッドで赤狩りに遭った記録映画監督レオを招きます。裁判が始まると、ミルトンにナチス残党から「一家皆殺しにする」と脅迫状が届きます。

テレビ局に、爆弾を持った男が突入の場面もあり、もしやと緊張で心臓の鼓動が早くなりました。

法廷の小さな窓に外からは見えないように隠しカメラが設置されます。アウシュヴィッツを生き延びたユダヤ人は長い間、虐殺がどのようにして行われたか、誰にも語れずにきたのです。生存者の証言はまさに地獄図であり、アイヒマンに見せる実録映像はとても正視できませんでした。

レオはアイヒマンの顔を執拗に追います。レオが映したかったのはアイヒマンの人間性でした。伝えたかったのは誰でもファシズムに傾倒し、残虐な人間になりうるということでした。しかしアイヒマンは裁判中も一切感情をあらわにせず、無表情のままでした。

傍聴したハンナ・アーレントも「悪魔のような人物ではなく思考の欠如した人間によって担われた」と語りました。

それまで明るみに出ることのなかった組織的なユダヤ人虐殺の実態が、112人による証言と実録映像によって、全世界に伝えたのです。圧力に屈せず裁判放送をし続けたテレビマンたちの真実を伝えたいという思いがひしひしと伝わってきました。

今、安保法が通り、戦争する国になるのではないかという時代に生きて、何度でもホロコーストの残虐な歴史を知る必要があるのではないでしょうか？人種差別は二度とあってはならないとこの映画は伝えています。

裁判後、虐殺事実をテレビで広めたレオに向かって収容所を生き延びた女性が「あなたのおかげよ」と話す場面が心に響きました。

「木靴の樹」
エルマンノ・オルミ監督

北イタリア・ロンバルディア地方のベルガモ。エルマンノ・オルミ監督が郷里への愛を込めて、農民たちの出演を得て撮った1978年の作品です。

大地主の厳しい搾取のもとで貧しい生活を強いられながらも、大地とともに力強く生きる農夫たち4家族の生活が描かれます。

バティスティ家も苦しい暮らしの中で、村から遠い学校へ息子を通わせています。息子の木靴が壊れてしまい、父は川沿いのポプラの樹を切って新しい木靴を作ります。その樹もまた地主の所有物でした。

牛や豚の生殺、畑仕事、村の祭りと、日々の喜怒哀楽を映像詩のように慈しみをこめて描きます。

親の手伝いをしたり、おじいさんの怪談を聞いて夜を過ごし、街の祭りに興じる。現地の村人が、素朴でとても自然でした。

3月に岩波ホールで観た映画です。

「ザ・トゥルー・コスト ファストファッション真の代償」

アンドリュー・モーガン監督

ファッション業界を支えている大量生産、大量消費の裏には多くの犠牲を強いられている貧しい人々がいました。バングラデシュでは400万人が繊維工場で働いています。

果たしてファッションにはどんなコストがかかり、誰がコストを引き受けているのか。煌びやかなランウェイからスラムまで、世界中を取材しライフスタイルを問い直すドキュメンタリーです。

石油業界に次いで、ファッション業界が環境に与える負荷は２番目に大きいのだそうです。

2013年、バングラデシュの首都ダッカで縫製工場が崩壊。1000人以上の人々が犠牲になりました。その事故を知って、アンドリュー・モーガン監督が、世界中のファッション業界をめぐる真実を探り30人にインタビューします。

縫製工場の労働者で、子育て中の母でもある女性は語ります。「私たちの血で作ったものをだれにも着て欲しくない」。バングラデシュでは危険な労働環境で基本的人権さえない状況で低賃金で働かされています。

インドではコットンの90パーセントが遺伝子組み換えの種子になっています。そのため、がんの発症率が高く、医療費が払えないなどで、16年間で25万人の農民が自殺していると語ります。Ｈ＆Ｍ　ＧＡＰ、ＺＡＲＡ、ユニクロなどの安い洋服は低賃金労働に支えられていることは知っているつもりでしたが、映像で畳みかけるように事実を突きつけられると、言葉を失うほどの衝撃を受けました。

この映画は途上国での人権侵害や環境汚染の上に成り立って来たシステムに警鐘を鳴らします。同時に人類が今後向かうべき未来を考察しています。

買っては捨てている消費者が、環境破壊をもたらしていることに考えさせられました。

手作りの上映会では、古着をリメイクしたり、フェアトレード＆オーガニックや亜麻の糸紡ぎなどの実演もあり、温かな交流の場になりました。

「最高の花婿」

フィリップ・ドゥ・ショーヴロン 監督

多様な人種や宗教が混在するフランス社会を背景に、敬虔なクリスチャン一家が娘の結婚相手をめぐって繰り広げる大騒動をユーモラスに描きます。フランスで1200万人を動員する大ヒットを記録しました。

ロワール地方の町シノンに暮らすヴェルヌイユ夫妻は信心深いカトリック教徒で、3人の娘がそれぞれユダヤ人、アラブ人、中国人と結婚。これから結婚する末娘には、せめてカトリック教徒と結婚してほしいと願っていました。娘の幸せのため婿たちを理解しようと奮闘する夫婦の姿が良かったです。ラストにジーンとしました。

北海道５区補選に奮闘した池田真紀応援イケマッキーズのメンバーと

購読料とカンパをありがとうございます（敬称略）3.30～5.23

飯部紀昭（札幌市）神原照子（登別市）カンパ　斉藤淳子（札幌市）カンパ　安川誠二（札幌市）カンパも　加藤多一（小樽市）カンパも　加藤幸子（東京都）著書　小野有五（札幌市）書籍　阿保亘（帯広市）　塩川哲男（札幌市）カンパも　森山軍次郎（美唄市）佐々木睦子（横浜市）カンパも　竹田とし子（函館市）カンパも　富盛保枝（室蘭市）カンパも　太田肇・朋子（鎌倉市）カンパ　大関裕美子（札幌市）新妻徹（札幌市）カンパ　和田マサコ（豊浦町）三浦恵美子（旭川市）カンパも

合計36,500円は印刷と送料に使わせていただきます。著書もありがとうございます。

2016.5.24 朝日

吉岡しげ美さん 来月3日音楽会

札幌、ピアノ弾き語り

金子みすゞら日本の女性詩人の詩に曲をつけてピアノで弾き語りをしている東京都在住の音楽家、吉岡しげ美さんのコンサートが6月3日午後7時から、六花亭札幌本店6階ふきのとうホール（札幌市中央区北4条西6丁目）で開かれる。

吉岡さんは1977年から各地でこの活動を続け、札幌での開催は2003年以来。「平和のなかでいのち輝く　吉岡しげ美ピアノ弾き語りコンサート」と題して、金子や茨木のり子、与謝野晶子の詩や短歌を、平和への思いや生命へのいとおしさをこめて歌う。原田公久枝さんによる歌とアイヌ民族の伝統楽器トンコリの演奏もある。

前売り2500円、当日3千円。中高生1500円、小学生以下無料。問い合わせは実行委員会の樋口さんにメール（minginga@agate.plala.or.jp）か電話（090・6870・9225）で。

朝日新聞　2016.5.24 掲載